

長田夏樹氏の契丹語ノートなど  
—「接尾語備忘録」の挙例と『慶陵』の記述—

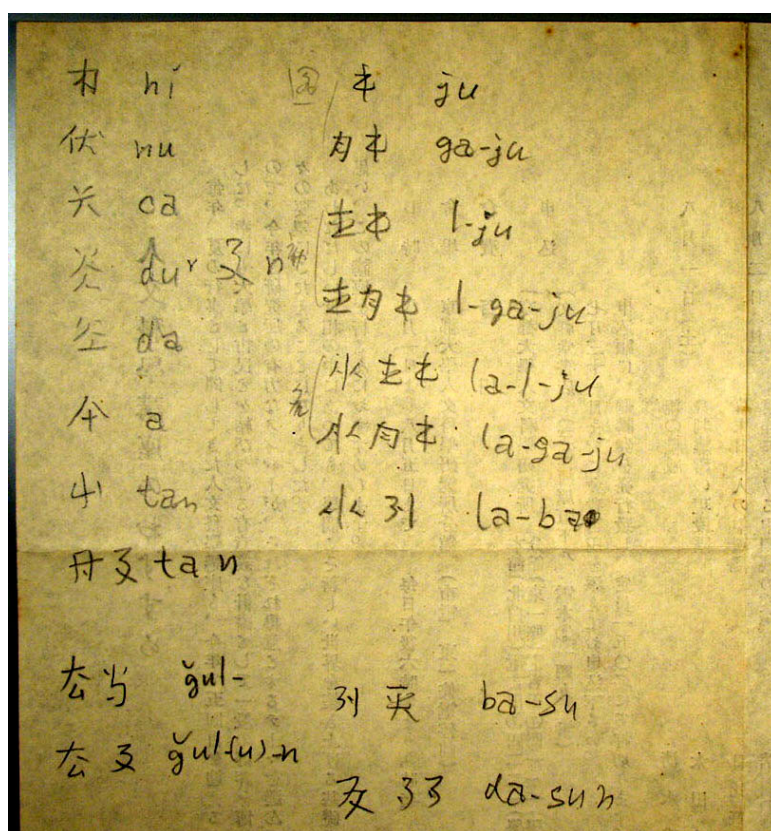
吉池孝一

1. 序言

『慶陵』(1953年刊)に契丹語の語構成法について「語根に接尾語がつけられている場合に、その接尾語の前半の部分が、語根の品詞をかえるためのものである例もかなり多くみとめられる」とある。『慶陵』にはこれ以上の説明も具体例もないが、長田夏樹氏(2010年1月逝去)が残したメモの中にこの記述に対応する具体例が存在することを以下に述べる。

2. 接尾語備忘録

長田夏樹氏逝去の後契丹語研究に係わるノートやメモなどが発見された<sup>1</sup>。その一部についてこれまで『KOTONOHA』などで紹介をさせていただいた。紹介した資料のなかに「接尾語備忘録」と命名した次のメモ書きがあった。



<sup>1</sup> 平成23年1月末、故長田夏樹先生の契丹語と女真語の研究に係わるノートやカードなどを長田家よりお寄せいただいた。

これは『慶陵』（田村實造・小林行雄著。1953年3月刊行）に付された2枚の表「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」（以下「接尾語表」と呼ぶ）の一部を抜き書きしたものである。このメモは「人文科学講座のおすすめ」（京都大学人文科学研究所人文学会主催、昭和28年(1953年)8月開催）という案内のウラに鉛筆で書かれたものであるから1953年8月前後のものとして大過ないであろう。筆跡からみて長田先生の直筆に相違ない。いま中央部分を翻字すると次のようになる。なお理解の便宜のため“名”の後の接尾語の**ネ**と**ガネ**に□を付す。

名	□ <b>ネ</b> ju	
	□ <b>ガネ</b> ga-ju	
動	□ <b>ルネ</b> l-ju	
	□ <b>ルガネ</b> l-ga-ju	
名	□ <b>ラルネ</b> la-l-ju	
	□ <b>【ル】ガネ</b> la-(l)-ga-ju	* □ <b>ガネ</b> は□ <b>ラルガネ</b> の誤写 <sup>2</sup>
	□ <b>ラ</b> la-ba	

“名”の後に**ネ**と**ガネ**、“動”の後に**ルネ**と**ルガネ**、さらに“名”の後に**ラルネ**と**ラルガネ**が付されている。これをどのように理解するかということであるが、先ず“名”と“名”を名詞、“動”を動詞の省略表記とみて、**ネ**と**ガネ**を名詞に後接する名詞語尾とするならば、それ以降を動詞+**ル**（動詞を名詞化する付加成分）+名詞語尾（**ネ**と**ガネ**）、名詞+**ラ**（名詞を動詞化する付加成分）+**ル**（動詞を名詞化する付加成分）+名詞語尾（**ネ**と**ガネ**）と理解することができる。すなわち、**ル**や**ラ**を、品詞を変換する付加成分と見なすことができるのである<sup>3</sup>。もっとも、これはメモの解釈であり、長田氏自身は何も語らない。

最近になって、『慶陵』の本文に、このような語構成法について言及している部分のあることに気付いた。もっとも、その部分には、かつて私自身がこの書を読んだときに心覚えに付した鉛筆書きの線があるから以前より気にかかっていた箇所なのであろう。その後、ノートやメモなどが発見され「接尾語備忘録」を紹介させていただく機会を得たわけであるが、その際『慶陵』本文の関係記述には触れなかった。迂闊としかいいようがない。遅まきながら以下にその部分を紹介する。

### 3. 『慶陵』の記述

『慶陵』の上巻「第四節契丹文字の哀冊」に次のような興味深い記述がある。

<sup>2</sup> 『慶陵』に付された「接尾語表」では**ラルガネ**とあるから**ガネ**を誤写とみる。

<sup>3</sup> 吉池孝一 2012a および吉池孝一 2012b 参照。

組みあわされた契丹文字には、その語尾の一原字ないし四個の原字が、名詞の格および動詞、形容詞などの接尾語を示す表音文字からなる場合がふくまれていることがあきらかになった<sup>註 13</sup>。これによって、われわれの行った接尾語識別の結果を示せば、別表のとおりである。(263 頁)

上記引用文中の註 13 は次のとおり。

註 13 語根に接尾語がつけられている場合に、その接尾語の前半の部分が、語根の品詞をかえるためのものである例もかなり多くみとめられる。(270 頁)

本文中の“別表のとおりである”とするところの“別表”とは『慶陵』に付された「接尾語表」のことである。これらの記述のうち、註 13 の記述が興味深い。註 13 の“語根の品詞をかえるためのもの”とは何かということにつき『慶陵』にはこれ以上の説明もなければ例を示すこともない。ただ、名詞語根に何らかの成分を付して動詞としたり、動詞語根に何らかの成分を付して名詞としたりするなど、モンゴル語をはじめアルタイ諸語に見られる語構成法が契丹語にも見られることを述べているのであろうということはある。また品詞を変換する付加成分が接尾語の前半部分であるというから、具体的な語例を想定していたものと考えられるが、残念ながら『慶陵』の記述からはこれ以上のことはわからない。しかしながら、この記述に対応する具体例が長田氏の「接尾語備忘録」であることは言をまたないであろう。“接尾語の前半の部分”が品詞を変える部分であるという点も『慶陵』の記述と「接尾語備忘録」の挙例は一致する。

#### 4. 結語

以上によって、契丹語の語構成法につき、『慶陵』の記述と長田氏の「接尾語備忘録」の挙例とが互いに補い合っていることを証し得たと考える。「接尾語備忘録」の挙例によって『慶陵』の記述に具体性を持たせることができるのである。また『慶陵』の記述は、「接尾語備忘録」の説明に相当するものであり、この記述によって単なる走り書きであった「接尾語備忘録」は学術的な意味を持ち得たのである。なお、契丹語がアルタイ語系統の言語であることは当時から斯界においてほぼ一致した認識であったから、付加成分によって品詞を変換するという見方の存在自体は驚くにあたらない。しかしながら、50 年代初期という契丹文字解読が緒に就いたばかりの時期に、かくも具体的に契丹語の語構成法を想定していたことは、契丹語研究史において特筆すべきことである。また、契丹語の語構成法につき「接尾語備忘録」と『慶陵』が補い合うという事実より、このような語構成法については、メモを書いた長田夏樹氏だけでなく、『慶陵』の著者である田村實造氏・小林行雄氏、「接尾語表」の作製者である小林行雄氏・山崎忠氏・長田夏樹氏の諸氏が共に抱いていた認識であったことも証し得たものと考えられる。

参考文献（発行年順）

- 田村実造、小林行雄 1953. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』（上巻本文冊）。東京：座右宝刊行会。
- 小林行雄、山崎 忠、长田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に関する考古學的調査報告』（上巻本文冊）。東京：座右宝刊行会。
- 吉池孝一 2012a. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど 一接尾語表備忘録一」, 『KOTONOHA』（古代文字資料館）第 110 号:1-8 頁, 2012 年 1 月。
- 吉池孝一 2012b. 「关于长田夏樹先生遗留的契丹小字解读工作的资料」, 『契丹学国际学术研讨会会议论文集』。中国：赤峰（主办单位：赤峰市人民政府、内蒙古博物馆、中国社会科学院民族学与人类学研究所、赤峰学院）:327-335 页, 2012 年 8 月。